

長野県におけるニホンジカ・ツキノワグマの分布変化とその規制要因 Changes in the Distribution of Deer and Black Bears in Nagano Prefecture and Regulating Factors

橋本 操^{1*}

Misao Hashimoto^{1*}

¹ 筑波大学大学院生, 日本学術振興会特別研究員

¹ Graduate Student, University of Tsukuba, JSPS Research Fellow

近年, 野生動物が人里に侵入し, 農林業被害や人身被害(以下, 獣害)を引き起こすことが顕著になっている。2010年度における全国の野生動物による農業被害は約 239 億円に上り, そのうちの 7 割がシカ(ニホンジカおよびエゾシカ), イノシシ, サルによる(農林水産省, 2012)。また, ツキノワグマやヒグマなどのクマ類は, 農林業被害と同時に人身被害を引き起こすことが懸念されている。

欧米では, 王侯貴族が, 領地内で持続的に狩猟を楽しむために領地内に生息する野生動物の個体数や生息地を管理するワイルドライフ・マネジメント(野生動物管理)が発達し, 3つの管理, すなわち1)個体数管理, 2)生息地管理, 3)被害管理が取り込まれてきた。日本の野生動物の管理は, 欧米のワイルドライフ・マネジメントの考え方を導入し, 国の定める鳥獣保護事業を実施するための基本的な指針に従って, 都道府県の鳥獣保護事業計画に基づき行われている。駆除などによる個体数管理や防護柵などを使用して野生動物の農地や集落などへの侵入を抑制する行動制御などの対策が一般的に行われている。しかし, 被害の発生している農地や集落の環境の整備, 野生動物の生息地の環境を回復するといった環境への働きかけはあまり活発ではないのが現状である。野生動物の生息環境を評価するには, 長期的な時間スケールでみた生息分布変化と環境変化との関係を考察することが必要である。

以上を踏まえ, 本研究では, 長野県を事例地域として, ニホンジカ(以下, シカ)およびツキノワグマ(以下, クマ)の分布変化をとらえ, その規定要因について分析した。

千葉(1964)は, シカとイノシシの生息分布を規定する環境条件として, 積雪深と常緑広葉樹林が重要なことを明らかにした。これに従い, 本研究でも, 積雪深や植生がシカおよびクマの生息分布に影響を与えていると仮定した。シカとクマの生息地のデータについては, 環境省生物多様性センターの自然環境保全基礎調査の哺乳類分布調査の5メッシュを使用した。植生データは, 同じく環境省生物多様性センターの自然環境保全基礎調査の植生調査の5万分の1現存植生図のGISデータを使用した。なお, 植生区分は, 自然植生度により分類をした。積雪深については, 長野地方気象台のデータからGIS解析用データを作成した。

分析方法は, シカおよびクマの2時期(1978年および2003年)の生息地を基準とし, それぞれの時期に対応する年代の積雪深とのオーバーレイ, 植生データとのクロス集計等を行い, それぞれの年代の生息地の環境条件と分析し比較する。

分析の結果, シカ, クマとも, 生息域を広げたことが明らかになった。従来, シカは積雪深が膝上以上である場所では, 生息が制限されると言われてきたが, 実際には積雪深1m以上の地域にも生息域が拡大していることから, 必ずしも積雪だけでその生息域が規定されるとは言えないことが新たにわかった。また, シカはクマに比べ, より人工的な植林地や二次林に生息していた。これは, シカの食性による影響であると考えられる。さらには, シカやクマは, 住宅地付近や近隣の畑にも生息域を広げていた。エネルギー革命や海外用材の輸入の影響を受けて, 薪炭材・建築用材の伐採が減少してきた。人間が森林を伐採しなくなったことから, 野生動物の生息できる環境が拡大してきていることが考えられた。

以上より, 生息環境の変化により, シカおよびクマの生息域が変化してきたため, シカやクマによる近年の人里への出没が度々起きており, 農林業被害, 人身被害が増加していると考えられる。

参考文献

千葉徳爾 1964. 日本列島における猪・鹿の棲息状態とその変動. 地理学評論 37, 575-592.

キーワード: ニホンジカ, ツキノワグマ, 生息分布, 規制要因, 長野県

Keywords: Japanese Deer, Asiatic black bear, Habitat, Factor, Nagano Prefecture